

を起こし重い脱腸病を併発し（平成二年九月二十日手術完了）次々と体調をくずし現在も保養中。

## 南方居住の動機

埼玉県 小澤 頼 助

私の部隊は、大東亜戦争勃発後、南方への転進命令に接し、満州を後に、昭和十七年九月二十七日、途中佛印、シンガポールに寄港、スマトラ島パレンバンに進駐いたしました。

私達の部隊の中から九人が満期除隊することになり、その中から四人が、現地除隊をして、国家のために微力をつくしたいと言われたので、さすが飛行団司令部の人達であるとの誇りを感じさせられました。数日して、燃料廠、および南方航空会社、その他へ就職がきまり、月給が二百円と決まりました。ところが安いので、内地へ帰って就職したら三百円もらえる。しかも中島飛行機製作所へ行けば、班長になれるからと。

他の戦友達は話していた。私はその言葉を聞き、生来一本気質だけに、胸の中で、「なんと情ない奴らだ、金のことなど言うなんて、お前達は内地に帰れ」と。一週間前に、大洋丸一万トン級の船が、南方各方面で必要な人材（技術者）を満載して内地から南方に向う途中、台湾沖で連合国の魚雷で撃破されたとのことで、南方では私達を初め、技術者は一人でも多く欲しいところですよ。

私はパレンバン州政府に履歴書を提出して、総務課長木元さんの面接を受け、採用されました。

昭和十八年一月二十日、パレンバン州政府へ奉職いたしました私は、気持を切りかえ、戦争は兵隊さんで、現地行政は私達軍政要員のつとめであるとの誇りと信念をもって微力をつくし、青春時代の七年間を国策の遂行にあたらせていただいた。一筋に祖国日本の繁栄と国家の安泰と大東亜諸民族を旨めさせ、立派に栄えるためにつとめました。しかしながら祖国の武運、利あらず、敗戦という冷酷な事態となり、想像できないような憂き目を見ることになりました。私は、今日

なお、この戦いの中にやってきた業績について、少しも恥じることはありませんし、私達のやったことに大きな誇りと名誉を感じています。戦後いち早く印度・フィリッピン・ビルマ・インドネシア・シンガポール・ベトナム・ラオス等が独立宣言のきっかけをつくってやったのは私達の仕事であつたと思います。今日、これ等の国々は、先進国に伍して、堂々と発展している事実、このことに大きな喜びを持っております。

昭和二十一年二月に入ると、内地へ帰還の噂があつちこつちで聞くようになりました。そして、私物の検査、連合国及び現地人に検閲を受け、シンガポール沖のリオ群島ガラン島、レバン島に集結させられました。一里か二里四方の小さな島で、噂で聞くと、第一次世界大戦にドイツ軍の捕虜が全員食糧が無くて、餓死したとかで内心良い気持ではなかつた。

仕事は、英国人の使役、農耕の仕事に従事して、少ない英軍食糧レーションを支給された。島の生活も約三か月、他の人達の年齢が中年以上のため、若い私は使役にも他の仕事にも率先働きに出、痛風で足があが

らなくなりました。そんなときパレンバン州長官に呼ばれて、病院船が入ってくる、政府から割り当て一人、高年齢、老人ということであるが、小澤は軍隊を入れて七年、一度も日本に帰っていないので、病気であるから帰るよういわれた。第一回病院船は、修理しながら、約一か月かかり、五月十二日広島県大竹港に上陸。七年ぶり日本の土を踏みしめる。戦争の悲惨と残酷さをいつまでも、忘れずに平和の尊さをたいせつに子々孫々に語り継ごう。